

【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

改編本『類聚名義抄』における和音注の継承と増補について

京都大学大学院文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 鈴木 裕也

一、『類聚名義抄』における呉音注と和音注の問題

『類聚名義抄』は漢字を部首により分類した漢和字書であり、平安時代に編纂された古辞書の中で最大規模のものである。『類聚名義抄』は原撰本（一一〇〇年頃成立、図書寮本）と改編本（一二世紀後半成立、観智院本、高山寺本、蓮成院本など）に大別され、通常『類聚名義抄』と言えば、唯一の完本である観智院本を指す。

観智院本の各被注字（見出し字）に対する注文は、おおむね「字体注、正音注、和訓注、和音注」の配列で並べられる。例えば、「備」字（仏上五七¹）の注文は、「上俗中通下正 皮秘反 ツフサニ²（平平調〇〇）ソナハレリ³（平上平平）（以下和訓一二例略）和^レヒイ⁴」¹）となっている。この例で正音注は「皮秘反」と反切で示され、和音注は「和^レヒイ」と「和」表示が付された片仮名音注で表される²）。

日本の漢字音は漢音、呉音、唐音の三種類に分けることが多く³）、一般的に正音は漢音を、和音は呉音を表すと考えられている⁴）。日本で漢籍を読む際は漢音で読まれ、仏典を読む際は呉音で読まれることが多い。漢音は唐代長安方言の音韻体系（秦音）を母胎としたもので、それ以前にあった日本漢字音（六朝期の方言音と考えられている）は呉音と呼ばれた⁵）。高松政雄（一九八二）は、「公式の表現、記録等」（一五頁）に漢音・呉音という用語が用いられ、その他の文献では正音・和音と言い習わされたとし、沼本克明（一九八二）は、一般的に「大般若経や法華経の転読（真読）に使用された音」（一七六頁）を和音とすると述べている。例えば、『日本紀略』延暦十一年（七九二）閏一月条に「勅。明経之徒、不可習音。発声誦読、既致訛謬。熟習漢音」（国史大系第一〇巻、二六六頁。本文校訂を反映しない形で示す）とある一方、観智院本『類聚名義抄』の凡例部分（篇目一一六）「朱音者正音也。墨声者和音也」は「正音」「和音」を用いる。

この観智院本『類聚名義抄』における凡例の一節は、山本（二〇一〇）⁶）などが指摘するように、同音字注や反切の傍仮名と声点について述べたものと考えられる。そのため、改編本『類聚名義抄』の和音注を検討する際、本来ならば「和」表示が付された音注に加え、墨書きの傍仮名と声点をも考察の対象とすべきであるが、この方針は帖毎に状況が異なり、和音注として一律に扱いたい。そこで、便宜上以下の考察では、「和」と冠せられる和音表示の音注のみを、改編本の和音注として取り扱う。

「和音」は「正音（漢音）」に対する日本の漢字音のことであるが、「呉音」は和音と同様の意味で日本の漢字音を表す他に、中国の漢字音（方言音）を指す場合があることに注意を要する（馬淵和夫一九六三第三篇第三章、沼本一九八六第二章第一節など参照）。日本の漢字音を指す場合には、呉音と和音は大略相重なるもの、同じものと考えられ、この

点については疑う余地がない。

しかしその場合、観智院本『類聚名義抄』の以下の例はどうであろうか（以下、私に傍線を付す箇所がある）。

「誑」〔「誑」の誤、法上七〇一〕「呉音逆」〔入瀬〕正虐 虚約反 タハフ^レル〔上上瀬平〕ワ
ラフ アサケル〔上上瀬〇〇〕イツハリ 楽也讚悪也 和又客

この字について、図書寮本は、

「談諱」〔八二七〕「応云許虐」〔入瀬〕反 戲一也 謂相調戲也亦喜樂也 真云戲言〔也〕

東云戲也譏謔也—浪戲談也—々然喜樂也 公云音逆〔入瀬〕正虐〔入瀬〕（弘）云戲也

楽也讚悪也 タハフ^レ〔上上瀬七〕詩 真云客〔〇〕音〕〔〇〕

とある。この「誑」字の場合、和音注（真云）が「客」であることに加えて、呉音注（公云）「逆」がある。同じ被注字に対して、本来同じであると考えられる呉音注と和音注が両方備わっているのは不可解である。それに加えて、呉音は「ギヤク」という音を表すのに対し、和音は「キヤク」という音を表すと考えられ、それぞれの音価が異なるのである。

観智院本の呉音注と和音注については、図書寮本と観智院本との比較によって、呉音注が藤原公任撰『大般若経字抄』（渡辺修一九五三）、和音注が真興と行円の読誦音（主に真興撰『大般若経音訓』（佚書）と推定されている。吉田金彦一九五四、築島裕一九七三）と出典が明らかにされている（7）。図書寮本で「公云」を冠する音注が呉音と表示されるのは、『大般若経字抄』二七丁裏（後序）に「注以漢吳二音相同之字。雖其音不違、至于浅智不遍知之字、不敢用之、偏依呉音、別載正音、或以仮名注之」とあることによると考えられている（沼本一九八二、第一部第二章（8）。この引用の解釈については、高松一九七三に詳しい）。『大般若経字抄』は大般若経の読誦音を表した音義書であり、真興や行円の読誦音を和音とするならば、『大般若経字抄』の表す音も和音と呼ばれて然るべきものである。また、図書寮本で主に「真云」を冠する和音注についても問題が多く、図書寮本では、漢文注（音注や義注、上例「真云戲言〔也〕」）と和音注（上例「真云客音」）の二種類の「真云」音注があるが、本稿は前者の音注が正音を表すものと考え、後者のみを和音注として考察の対象とする（9）。

このように疑問の多い呉音注と和音注であるが、最大の疑問は本来同じであると考えられるはずの呉音注と和音注が、以上に見てきたように『類聚名義抄』ではあたかも使い分けがあるように見えることである。『類聚名義抄』の編者が呉音と和音を同一と見ていたか否かは、当時の辞書編纂や漢字音に関わる興味深い問題である。

この点について、夙に吉田（一九五一）は、『廣韻』と観智院本の呉音注・和音注を比較し、「和音は梵音学習に刺戟されて自覚し漢字音と対抗して用ゐられたが元来呉音に哺乳されて育ったものであるから其差別は既に立ち難く僅か乍ら名義抄の漢字注にあっては統計による比率に於て差異を見うるにすぎない。大体に於ては、名義抄の和音は法華経など佛家傳承の呉音と同一である」（五二頁）とされた。また吉田（一九五四）において、呉音と和音の呼び分けは、南都北嶺の拮抗による「自宗所伝音を認識する」（一三頁）ためであると述べた。

渡辺修（一九七〇）は、観智院本の呉音と和音の唇音字に着目して、呉音と和音には「相当の差異がある」（一二二頁）とされた。

田尻英三(一九七二)は、図書寮本の和音注の三内韻尾、三内入声、声調を調査し、観智院本の呉音と和音は、漢字注と仮名注であるため別次元の意味を持つとされたが、和音の語形や声調は呉音に属すと述べた。

高松(一九七三)は、『大般若経字抄』の音注を詳細に検討し、『類聚名義抄』における呉音と和音の小異は、「両者の体系的な対立の一端を覗かせるものではなくして、実は同じものの偶々のゆれ」(五〇頁)であり、両者相同とされた。

沼本(一九八二、第一部第二章)は、図書寮本『類聚名義抄』の「真云」和音注が大般若経読誦音であることを導き、「真云」「公云」として示された音注は、共に大般若経読誦音として一元的に把握し得るものであって、それぞれに付加的に出現する「和音」「呉音」という名称の相違は本質的な意味を何ら有していない(二二五頁)とされた。また観智院本の和音注は「図書寮本真興和音を通しての大般若経読誦音の上に、そこに無いものを法華経読誦音で部分的に補うという性格」(二二三頁)を持ち、大般若経読誦音と編者の増補(法華経読誦音が含まれる)とを含む複層性の上に成り立つと述べた。

望月郁子(一九九二、第一部第五章¹⁰)は、大般若経音義と法華経音義を用いて、『類聚名義抄』の和音注の被注字が大般若経字彙か法華経字彙かを調査し、観智院本の和音注が「法華経字彙に集中して現れる傾向が顕著」(五一五頁)であることを導き、観智院本は、法華経の読誦音を示すことが第一の意図であるとされた。このことから、和音注と「呉音注」とに区別がないと見るのは誤りである(五二二頁)と述べた。

沖森卓也(一九八二)は、法華経読誦音と観智院本の和音を比較し、両者の声調体系が近いことを導き、法華経読誦音と一致しないものに呉音と和音という異なった名称の並存する要因の一つがあるとされた。

山本秀人(一九八九)は、高山寺本が呉音を表示し和音を表示しないことから、呉音と和音が「字音の内実としては同等であっても、高山寺本の編者の認識としては別物であった」(一一頁)とされた。

以上主要な先行研究を概観したが、『類聚名義抄』の呉音注と和音注に関して、渡辺修氏、望月氏、山本氏は呉音と和音が異なるとし、高松氏、沼本氏は呉音と和音が同じとする(他の氏は判断の難しいところがあるので今は措く¹¹)。

『類聚名義抄』の編者が呉音と和音を同一と考えていたか否かという問題を解決するにはどうしたらよいか。この問題の本質は、『類聚名義抄』における呉音と和音が、中古音と比較するなどの統計において僅かな差異しか見られず内実として同じと考えられる一方、『類聚名義抄』が呉音と和音の二つの表示を残すからには両者に何か違いがあると考えられることにある。その上問題を複雑にするのは、図書寮本において呉音(公云)と和音(真云)は共に大般若経を中心とした読誦音を表す(そのため呉音と和音を呼び分ける理由が不明である)が、改編本における和音注は図書寮本由来の大般若経読誦音に加えて、法華経の読誦音と考えられるものが交じる(望月一九七九、沼本一九八二等)という点である。したがって、改編本の呉音と和音は出典の異なりによる区別でなく、また大般若経読誦音と法華経読誦音による区別でもない。もし『類聚名義抄』に呉音と和音という二つの表示が存在する理由が判明すれば、この問題を解決する糸口が掴めると考えられる。

改編本の和音注は、原撰本の大般若経読誦音を継承するもの(以後この和音注を「原撰本継承和音」と呼ぶ)と、法華経読誦音を中心として増補したもの(以後この和音注を「改

編本増補和音」と呼ぶ)の二種類がある。ここでは、原撰本と改編本で和音注の付される被注字が一致するものを原撰本継承和音とし、原撰本の被注字に和音注がなく、改編本の被注字に和音注があるものを改編本増補和音とする⁽¹²⁾。この点に留意した上で、まず原撰本から改編本へと和音注が改編される様相を見ていき(二章)、次に改編本諸本間での和音注の様相を見ていく(三章)。その中で増補された和音注が大概若経出現字か法華経出現字かを調査して、この問題を捉えていく。最後に、これまでの和音注の調査結果から、改編本の系統や祖本について考察する(四章)。

二、原撰本『類聚名義抄』と改編本『類聚名義抄』との和音注の比較

1 呉音注と和音注が一方へ統合されることの考察

はじめに、原撰本と改編本の間で呉音注と和音注を比較する。原撰本である図書寮本は零本のため、原撰本と改編本が比較可能なのは、観智院本法上・法中帖と蓮成院本中一帖の一部(水部、ㄱ部、言部)である⁽¹³⁾。

当該範囲の和音注は図書寮本で二五七例、観智院本で三六四例、蓮成院本残存部で一〇七例である。観智院本の和音注の中で原撰本継承和音は一四四例、改編本増補和音は二二〇例である⁽¹⁴⁾。

また当該範囲の呉音注は図書寮本で九三例、観智院本で五七例、蓮成院本残存部で一四例である。当該範囲の観智院本(改編本)の呉音注の被注字は、図書寮本と全て一致し、和音での用語を援用すれば全例が「原撰本継承呉音」であって、「改編本増補呉音」は存在しない⁽¹⁵⁾。図書寮本では和音注の数は呉音注の数の三倍弱(二・八倍)であったが、観智院本では和音注の数が呉音注の数の六倍以上(六・四倍)である。原撰本から改編本に改編されるにあたって、呉音はその数を減じ、和音はその数を増している。これは改編本が増補した呉音注の被注字が存在せず、改編本の増補した和音注の被注字が非常に多く存するということが関係している。改編本の編者は呉音の増補を行わず、和音の増補のみを行っている。これは一種の使い分けのように思われ、呉音と和音が異なることの証左たりうるが、改編本(観智院本及び蓮成院本)の編者が和音に表記を統一しようとした結果生じる現象と考えられる。これについては後述する。

まず、呉音と和音を異なるものと考えさせる原因であるところの、同じ被注字に対して呉音注と和音注の両方が載る例を見ていく。図書寮本で一つの被注字に呉音注と和音注の両方が載る例は三八例である。原撰本のこれらの例に対し、改編本でどのような音注が当てられるかを検討する。

望月(一九七九)は、図書寮本が「公云」「真云」として区別している音注を改編本が一方に統合した例に言及した。この指摘を踏まえ、図書寮本と対照可能な部分(観智院本の法上・法中帖)を調査すれば九例が見られる(蓮成院本は二例)。例えば次のようなものである⁽¹⁶⁾。

・ 図書寮本「漑灌」(九四)

「上応云歌賚^(去) 反―灌也謂灌注也 東云滌浹也沈―條流貌 玉云晝也又音既^(去)

呉音公云蓋^(去) ソ、ク^(上) 真云又キ(以下「灌」字の注なので略)」

・ 観智院本「漑」(法上二五八)

「古氏反 又既音 マカス 水ソ、ク 水マカス ソ、ク^(上上〇) ヒヲ アラフ 呉音
蓋又キ」⁽¹⁷⁾

・ 図書寮本「慊—(恒)」(二五一七)

「応云苦簞^(七) 反—厭也厭足也快也(中略) 真云切恨也疑也或嫌憎—也恨也通用 公

云音劔^(去) 恨也 真云ケム^(平平)」

・ 観智院本「慊」(法中二二八6)

「下兼反 ウタカフ^(上上〇〇) キラフ ソネム 嫌二正 ウラム ネカフ 苦簞^(七) 反

厭 呉劔又平」⁽¹⁸⁾

後者「慊」の例は、図書寮本で「公云音劔」が去声であるのと、「真云ケム」が平声であるのを一つの注に統合したものと考えられる。このような例が複数存在するのは、改編本の編者が呉音注(公云)と和音注(真云)は同一であるという認識を持っていたことを裏付けるものである⁽¹⁹⁾。この九例の内、八例が和音を呉音の中に統合したものであり、一例が呉音を和音の中に統合したものである。その一例は、観智院本「填」字(法中一八二8)の「和音傳テム」である⁽²⁰⁾。これは図書寮本「填彩」(二一五6)の「公云音傳^(去)」と「真云テン^(平平)」を統合したものと考えられる。

以上のように、図書寮本で一つの被注字に「公云」と「真云」「行円云」の両音注を持つ三八例中の九例が一方へ統合された音注である。その他の例は、以下のB〜Eの四つのパターンに大別できる。

A、観智院本で一方の注に統合されるもの 九例(前述)

B、観智院本で呉音注のみが残るもの 一五例

(例)「憎」(二五八4)「公云音攝^(去)」「真云セフ^(〇平)」↓(法中二二五1)「呉攝」

C、観智院本で和音注のみが残るもの 九例

(例)「濡」(二三2)「呉音公云儒^(平)」「行円云—^(去)」↓(法上九7)「和又去」

D、観智院本で呉音注と和音注の両方が記載されないもの 四例

(例)「漬」(一一4)「呉音公云四^(平)」「真云シ^(平/去)」↓(法上二七4)

E、観智院本で呉音注と和音注の両方が記載されるもの 一例(前例の「謹」)

この結果から、図書寮本で呉音注と和音注の両音注を持つものが観智院本で継続して両音注を持つものは、わずか一例であって、他は呉音注のみ又は和音注のみ(或いは両音注とも記載されない)となっている。このことから、観智院本(改編本)の編者は呉音注と和音注の両者を同時に掲出することを避け、どちらか一方に限定しようとしたと考えられる。つまり、一字に呉音注と和音注の両方の注があると(現にそうであるように)混乱をきたすので、それを避ける意図ではないかと想像されるのである。このことの傍証として、観智院本の法上・法中帖で、一つの被注字に呉音注と和音注の両音注を持つものは、前掲「謹」と「注」(法上四一1)の「和チウ」「呉趣」のわずか二例のみであることが挙げられる⁽²¹⁾。先の改編本が和音注のみを増補する理由も、呉音注と和音注の両方を増補すると混乱が生じるため、和音注に限定しようとしたことにあると思われる。

また、原撰本が一つの被注字に「公云(呉音)」「真云(和音)」の両音注を掲げること

のみでは、図書寮本の編者が呉音と和音を異なるものと考えていたことにならない。正音注（漢音注）に複数の反切や同音字注が付されることは普通であるし、基本的に公任の同音字注は、注字を呉音で読めば被注字の呉音となり、注字を漢音で読めば被注字の漢音となると考えられる（沼本一九七八）から、漢音と呉音を両立した音注である。「公云」と「真云」の引用態度や用語の違いは、呉音注がこのような同音字注を付し（表記が漢文注に近い）、和音注が主に仮名音注を付す（表記が和訓に近い）ことによるとも考えられるし、吉田（一九五四）の述べるように南都（真興）北嶺（公任、公任が天台宗に近いことは渡辺修一九五三参照）の違いとも考えられる⁽²²⁾。なお検討の必要はあるが、両者を「大般若経を読むための音注」と認識していたと考えることに矛盾はしない。

2 改編本増補和音の被注字選択と大般若経・法華経

改編本の和音に法華経が関わるといふ指摘がなされている（望月一九七九、沼本一九八二、望月一九九二）。望月氏は観智院本の和音注と法華経単字及び法華経音義、大般若経音義との対照を行い、沼本氏は両音字に関する調査を行った。ただ、改編本『類聚名義抄』の和音注は原撰本由来の大般若経読誦音も残存するので、法華経の影響を示すためには、大般若経出現字でなく法華経出現字である例を多く指摘しなければならぬ。沼本（一九八二）が指摘するように、法華経出現字が大般若経出現字に収まる可能性があるためである。法華経は八巻、大般若経は六〇〇巻であり、大般若経音義は法華経音義より簡単な字を捨象する可能性が高く、音義書の対照だけでは調査として不十分である。そのため、和音注が付される被注字ごとに大般若経と法華経を対照し、その被注字が出現するかを確かめる必要がある。しかし、手間が膨大であるので、本稿では便宜上以下の手法をとることによって、二氏と異なる手法でより詳細な調査を行い、改編本の和音にどの程度大般若経と法華経が関わるかということを明らかにする。

まず、図書寮本と観智院本（法上・法中帖）の全ての和音を抜き出し、それらを対照して、ア図書寮本のみには和音注が掲載されるもの（一一三例）、イ原撰本継承和音（図書寮本と観智院本で同じ被注字に和音注が付されるもの、一四四例）、ウ改編本増補和音（観智院本のみには和音注が掲載されるもの、二二〇例）に分ける。

〈大般若経出現字であるかどうかの調査〉⁽²³⁾

安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多経』（東辻保和一九七一、東辻・岡野二〇〇七）を用い、音注が付されているかを調査する。また、『S A T大正新脩大藏経テキストデータベース²⁰¹⁸』を用いて（被注字）大般若波羅蜜多経」と検索し（例えば「汎 大般若波羅蜜多経」、「概 大般若波羅蜜多経」）、大般若経に出現するかを調査する（大般若経の序は除く）。以上の調査で大般若経に出現しないとされた字に関して、『慧琳一切経音義』巻一〜巻八、『大般若経字抄』で被注字となっているものを大般若経出現字とし、最後まで残った字を、便宜上大般若経に出現しない字とする。

〈法華経出現字であるかどうかの調査〉⁽²⁴⁾

『法華経単字』及び島田友啓（一九六四）を用い、音注が付されているかを調査する。また、『S A T大正新脩大藏経テキストデータベース²⁰¹⁸版』を用いて（被注字）妙法蓮華経」と検索し（例えば「水 妙法蓮華経」、「法 妙法蓮華経」）、法華経に出現するか

を調査する（法華經の序は除く）。

以上の調査で法華經に出現しないと考えた字に関して、仲算撰『妙法蓮華經積文』で被注字となっているものを法華經出現字とし最後まで残った字を便宜上法華經に出現しない字とする。

結果を以下に示す。図書寮本（エ）と観智院本法上・法中帖（オ）の全和音の比率も合わせて掲げる（表1参照）。

ア 図書寮本 のみに和音注が掲載されるもの（一一三例）

 大般若經出現字かつ法華經出現字 三四例（三〇・一％）

 大般若經出現字であり法華經出現字でない 六四例（五六・六％）

 大般若經出現字でなく法華經出現字である 二例（一・八％）

 大般若經にも法華經にも現れない 一三例（一一・五％）

 ↓大般若經出現字 九八例（八六・七％）

 法華經出現字 三六例（三一・九％）

イ 原撰本継承和音（一四四例）

 大般若經出現字かつ法華經出現字 七七例（五三・五％）

 大般若經出現字であり法華經出現字でない 五一例（三五・四％）

 大般若經出現字でなく法華經出現字である 一例（〇・七％）

 大般若經にも法華經にも現れない 一五例（一〇・四％）

 ↓大般若經出現字 一二八例（八八・八％）

 法華經出現字 七八例（五四・二％）

ウ 改編本増補和音（二二〇例）

 大般若經出現字かつ法華經出現字 一七二例（七八・二％）

 大般若經出現字であり法華經出現字でない 八例（三・六％）

 大般若經出現字でなく法華經出現字である 三四例（一五・五％）

 大般若經にも法華經にも現れない 六例（二・七％）

 ↓大般若經出現字 一八〇例（八一・八％）

 法華經出現字 二〇六例（九三・六％）

エ 図書寮本の和音（ア＋イ）（二五七例）

 大般若經出現字かつ法華經出現字 一一一例（四三・二％）

 大般若經出現字であり法華經出現字でない 一一五例（四四・七％）

 大般若經出現字でなく法華經出現字である 三例（一・二％）

 大般若經にも法華經にも現れない 二八例（一〇・九％）

 ↓大般若經出現字 二二六例（八七・九％）

 法華經出現字 一一四例（四四・四％）

オ 観智院本の和音（イ＋ウ）（二六八四例）

 大般若經出現字かつ法華經出現字 二四九例（六八・四％）

 大般若經出現字であり法華經出現字でない 五九例（一六・二％）

 大般若經出現字でなく法華經出現字である 三五例（九・六％）

 大般若經にも法華經にも現れない 二一例（五・八％）

 ↓大般若經出現字 三〇八例（八四・六％）

 法華經出現字 二八四例（七八・〇％）

また、図書寮本の呉音注の被注字（九三例）は全てが大般若経出現字であり、法華経出現字は一六例（一七・二％）である。観智院本の呉音注の被注字（五七例）は全てが大般若経出現字であり、法華経出現字は九例（一五・八％）である。

アとイの「法華経出現字」を比較すると、原撰本から改編本へ改編される際、和音注が残されるかどうかの一因に法華経に出現する字か否かということが関係していると推測される。イとウの「法華経出現字」を比較すると、改編本増補和音（ウ）の被注字選択は法華経が大きく関わっていると言える。また、原撰本継承和音（イ）と改編本増補和音（ウ）は「大般若経出現字」の比率も非常に高い。原撰本は主として「大般若経出現字」を和音としたことに対し、改編本は大般若経と法華経の両経典に出現する字を和音として重視したことが窺える。

ただし、和音注が付される被注字には「大般若経にも法華経にも現れない」字が存在し、法華経に現れる字が、必ずしも改編本で和音注を持つわけではないので、大般若経と法華経以外の要因も考える必要があることに留意しなければならぬ。ここで、改編本増補和音は、法上から見ていくと「水」「法」「海」「源」「江」と出て来るが、原撰本の和音が「汎」「泛」「濟」「漑」「灌」「灑」と出てくると比べて、一般的に使用される字が多いように思われる（例えば「漑」は大般若経で「漑灌」の用例のみ見られるなど）。改編本では、大般若経や法華経に出現する字を中心として、大般若経や法華経以外の仏典に現れる字にも和音注を付し、和音注が増補されていたと想定される²⁵⁾。

改編本の編者が呉音と和音を同一と考えていたか否かという問題は、以下のようにとまとめられる。

㉑ 呉音と和音の表す音が共に呉音系の字音であることに加えて、原撰本から改編本に改編される際に、「公云」「真云」（「行円云」）注が一方に統合されること、同じ被注字に呉音注と和音注の両方を載せることを避ける傾向があることから同一と考えられる。

㉒ 改編本の呉音は被注字の増補がなく、原撰本の「公云」注を継承するので、『大般若経字抄』由来の大般若経読誦音を反映する。それに対して、改編本の和音は、

表 1 原撰本と改編本の比較調査結果	用例数	大般若経出現字かつ法華経出現字 (%)	大般若経出現字であり法華経出現字でない (%)	大般若経出現字でなく法華経出現字である (%)	大般若経にも法華経にも現れない (%)	大般若経出現字 (%)	法華経出現字 (%)
ア (図書寮本のみ)に和音注が掲載されるもの)	113	30.1	56.6	1.8	11.5	86.7	31.9
イ (原撰本継承和音)	144	53.5	35.4	0.7	10.4	88.8	54.2
ウ (改編本増補和音)	220	78.2	3.6	15.5	2.7	81.8	93.6
エ (図書寮本の和音)	257	43.2	44.7	1.2	10.9	87.9	44.4
オ (観智院本法上・法中帖の和音)	364	68.4	16.2	9.6	5.8	84.6	78.0
図書寮本の呉音	93					100.0	17.2
観智院本法上・法中帖の呉音	57					100.0	15.8

原撰本継承和音（基本的に『大般若経音訓』由来の大般若経読誦音を反映する）と改編本増補和音（大般若経に加えて法華経などの影響がある）が合わさっており⁽²⁶⁾、呉音の様相と異なるため相違すると考えられる。

このように観智院本の呉音と和音は矛盾した性格を有している。これは、㊤と㊦が同一人物によってなされたと考えることに原因があると思われる。つまり、この問題は㊤と㊦が別の人物によってなされた営為であると考えることで解決できる。すなわち、㊤が改編本共通祖本（原撰本から改編本に改編された最もはじめの改編本、渡邊實一九六〇は一巻四〇部首を収める三巻編成と推定）の編者によるもの、㊦が観智院本祖本及び蓮成院本祖本の編者によるものと考えるのである。このことを明らかにするため、次に改編本の諸本間で和音注の比較を行いたい。

三、改編本諸本間での和音注の比較

1 高山寺本の和音注

次に、改編本諸本間で呉音注と和音注を比較する。西念寺本と宝菩提院本は観智院本と近い関係にあるので今は措き、観智院本、高山寺本⁽²⁷⁾、蓮成院本の呉音注と和音注を対象とする。高山寺本と蓮成院本は零本なので、この三本が対照できるのは観智院本の仏上・仏中帖である。観智院本を基準とすると、高山寺本は肉月部、蓮成院本は人部ノ足部と肉月部の一部を欠く⁽²⁸⁾。蓮成院本はこの上一帖に声点がほとんどない点、他の帖と異なる。

夙に岡田希雄（一九二三、岡田一九四四第二篇第一章）に指摘があるが、高山寺本の和音注記は「和音」と断らず、ほとんど「音」や「又音」などの形式で記されている⁽²⁹⁾。以下に一例を挙げる。

観智院本「位」（仏上二五二）「胡愧反 クラキ イカタ^(上上上) 鑄器 タ、ヒラ

ヨシ 和^(平)中^(平)」

高山寺本「位」（八七）「胡愧反 クラキ^(上上上) ヨシ タ、ヒラ 音^(平)中^(平)」

蓮成院本「位」（六三）「胡愧反 クラキ ヨシ タ、ヒラ 和^(平)中^(平)」

また、基本的に蓮成院本は、観智院本と同様和音注に「和」表示を付すが、次の例のように、高山寺本と同じく「又音」などで和音を表示することがある。

観智院本「脩」（仏上二八三）「上二俗下二正又儻字 音叔 和^(平)宿 漢書蕭音 速

疾也 ヲキユ」

高山寺本「脩」（一〇七）「上二俗下二正又儻字 音叔 速也 疾也 又^(平)音^(平)宿 漢書

蕭音」

蓮成院本「脩」（八三）「上二俗下二正又儻字 音叔叔イ 速也 疾也 又^(平)音^(平)宿 漢

書蕭音」

観智院本の仏上・仏中帖には、和音注が三七三例（肉月部を除くと三四四例）見られる⁽³⁰⁾。高山寺本と観智院本・蓮成院本を対照し、観智院本及び蓮成院本の和音注が高山寺本にも音注として存在するものは二〇八例（内観智院本に見えないもの四例）である。蓮成院本は和音注が二七七例（内観智院本に見えないもの六例。肉月部を除くと二六七例、内観智院本に見えないもの五例）である（表2参照）。観智院本と対照すると、六五例の和音注が人部く走部の欠損部分に存する。また、観智院本では和音注であるが、蓮成院本で高山寺本のように「和」が冠せられない「音」「又音」形式の音注となっている例（前述）は五例見られる（「耽／耽」（四七五／五二六）は一方がこのような例で、もう一方に和音注がある。他の四例は和音注の数に入れていない）⁽³¹⁾。

以上をまとめ、比較の便宜上肉月部を除いた仏上・仏中帖の和音注の数は、観智院本が三四四例、高山寺本が二〇八例で、観智院本の和音数は高山寺本の和音数に比してかなり多い。蓮成院本の欠損六五例について、観智院本でもこれらを数に含めない場合、観智院本の和音数は二七九例、蓮成院本の和音数は二六七例で、観智院本の和音数は蓮成院本の和音数よりもやや多い。

また、観智院本の仏上・仏中帖には呉音注が三九例（肉月部を除くと二七例）見られる。これら呉音注は、欠損部を除けば、蓮成院本では全例、高山寺本は「匪」（六九一）を除いた全例が見られる。ただし、高山寺本で「徐」（四六四）、「匡」（六八六）の二例は「呉」表示がなく、「音」表示となっている。

したがって、仏上・仏中帖において三本を対照したとき、呉音注は基本的に三本とも共通しているが、和音注の数は高山寺本、蓮成院本、観智院本の順で増加する。高山寺本は他の二本と比べ和音数がかなり少なく、観智院本の六割程度（六〇・五％）しか存在しない⁽³²⁾。観智院本と蓮成院本はほとんど和音注が共通するが、中には蓮成院本に、和音表示のない高山寺本の形態の音注（五例）がある点、観智院本の和音注が蓮成院本と高山寺本の両者に見えない例（九例）がある点⁽³³⁾から、蓮成院本は観智院本と高山寺本の中間的性質を持つと言える。

2 高山寺本の和音注と「和」表示は削除されたものかの検討

岡田（一九二三）は、高山寺本に和音注が少ない点、和音表示がなく「音」表示である点から、「高山寺本の方が観智院本よりも先きに来たもの」（一七頁、岡田一九四四で一八一頁）と考えた。山本（一九八九）は図書寮本に和音表示があることから、観智院本や蓮成院本のように和音注を表示するものを本来の形と考え、高山寺本の和音注の「音」表示や和音注の削除を高山寺本独自の改変とした。また、観智院本の正音と和音が声調を除いて同音形である場合、高山寺本で和音注の削除が多いと述べた。以下では、高山寺本に和音注が少なく、和音表示されなかったことが、高山寺本がもとと改編本共通祖本（最初ははじめの改編本）にあった和音を削除したのか、観智院本や蓮成院本が高山寺本のような本に和音を増補したのか、どちらの理由によるかについて検討を加えたい。先に結論を言えば、観智院本及び蓮成院本が、高山寺本の形態に近い改編本共通祖本に和音を増補した

表2 改編本の和音数 (仏上・仏中帖)	和音の総数	肉月部を除く和音数
高山寺本	208	208
蓮成院本	277	267
観智院本	373	344

と考えられる。

ごく自然に考えれば、辞書は増補されていくものであるから、注文が削除される場合それ相応の理由が必要である。呉音と和音は、内実として両者呉音系の字音であるが、先に見たように呉音注は「匪」一例しか削除されず、和音注は多くの削除がある、ということとは不自然である。また、当時「和音」は多くの文献に見える一般的な語であって、「呉音」は平安時代後期の藤原公任撰『大般若経字抄』から用いられた(馬淵一九七七など)。そのため、凶書寮本に和音表示が見えるから改編本共通祖本にも和音表示が存在すると思われることには、尚再考の余地があろう。

また、漢音と呉音は、声調以外の音が同じであっても、声調が平声と去声で対立する場合や、清濁で対立する場合が多い。

・観智院本「邏」(仏上六七二)「盧賀^(毛)反 (和訓略) 和ラ^(平)」

『廣韻』では「郎佐切」(去声・箇韻)、来母開口。漢音が去声で和音が平声である。

・観智院本「瞬」(仏中一八三二)「音舜 (和訓略) 又作眇 和順^(平濁)」

『廣韻』では「舒閏切」(去声・稗韻)、審母合口。漢音は去声で清音であり、和音は平声で濁音である。

この二例は観智院本に和音注が存在し、高山寺本には存在しない例である。このような漢音と呉音で声調や清濁が対立する例は多く見られ(声点等がなくてもこのような対立があった可能性はある)、音が同じであるからといって、和音注が削除されたとは考えがたい⁽³⁴⁾。

以上のことから、高山寺本は、正音と和音の音が同じである場合、和音注を削除する方針であったとは考えられない。次節では、和音注が高山寺本に少ない点は、高山寺本が和音注を削除したのか、後に観智院本・蓮成院本で和音注が増補されたのか、ということをも別の面から考察していく。

3 高山寺本に存在しない和音注と大般若経・法華経

先に原撰本から改編本に改編される際、和音注が増補される被注字は、大般若経と法華経に共通して出現する傾向があることを述べた(二章2節)。観智院本仏上・仏中帖に原撰本の存しないことが惜しまれるが、高山寺本に存在せず観智院本(及び蓮成院本)に存在する和音注の被注字(次表のキ)が、大般若経と法華経の両経典に出現する傾向が高ければ、それらを削除することは考えがたいので、後に観智院本と蓮成院本がそれらの和音注を増補したことが考えられる。逆に、それらの和音注の被注字が、法華経に出現する傾向が低ければ、法華経を重視するため、原撰本由来の大般若経読誦音を中心に排除した、すなわち高山寺本がそれらの和音注を削除したことが考えられる。

調査範囲を観智院本の仏上・仏中帖、高山寺本、蓮成院本上一帖とし、先に行った調査の手順で、改編本の和音注の付される被注字が大般若経に出現するか、法華経に出現するかを調査した(表3参照)。

カ高山寺本の和音(二〇八例)

大般若経出現字かつ法華経出現字 一三五例(六四・九%)

大般若経出現字であり法華経出現字でない 二九例(二三・九%)

大般若経出現字でなく法華経出現字である 二六例(二二・五%)

大般若経にも法華経にも現れない 一八例(八・七%)

↓大般若経出現字 一六四例(七八・八%)

法華経出現字 一六一例(七七・四%)

キ高山寺本に存在せず観智院本に存在する和音(一四〇例)

大般若経出現字かつ法華経出現字 一〇六例(七五・七%)

大般若経出現字であり法華経出現字でない 二一例(二五・〇%)

大般若経出現字でなく法華経出現字である 六例(四・三%)

大般若経にも法華経にも現れない 七例(五・〇%)

↓大般若経出現字 一二七例(九〇・七%)

法華経出現字 一一二例(八〇・〇%)

ク蓮成院本の和音(二七七例、高山寺本の形式の音注は除く)

大般若経出現字かつ法華経出現字 一八九例(六八・二%)

大般若経出現字であり法華経出現字でない 四五例(一六・二%)

大般若経出現字でなく法華経出現字である 二三例(八・三%)

大般若経にも法華経にも現れない 二〇例(七・二%)

↓大般若経出現字 二三四例(八四・五%)

法華経出現字 二一二例(七六・五%)

ケ蓮成院本に存在せず観智院本に存在する和音(一九例、クで除いた高山寺本の形式

の音注を含む、「孰／眈」はク、ケに一例ずつ入れる)

大般若経出現字一四例、法華経出現字一一例

コ観智院本の和音(三七三例)

大般若経出現字かつ法華経出現字 二五〇例(六七・〇%)

大般若経出現字であり法華経出現字でない 五六例(二五・〇%)

大般若経出現字でなく法華経出現字である 三五例(九・四%)

大般若経にも法華経にも現れない 三二例(八・六%)

↓大般若経出現字 三〇六例(八二・〇%)

法華経出現字 二八五例(七六・四%)

サ観智院本に存在せず蓮成院本に存在する和音(六例)

大般若経出現字五例、法華経出現字四例

また、観智院本の呉音注の被注字（三九例）は全て大般若経出現字であり、法華経出現字は七例（一七・九％）である。

先の図書寮本（ア、イ、エ）と、高山寺本（カ）、蓮成院本（ク）、観智院本（ウ、オ、コ）とを比較すると、改編本（オ、カ、ク、コ）は、「大般若経出現字かつ法華経出現字」が六〇～七〇％であるなど、全体としてほぼ同じ比率である。原撰本が大般若経に出現する字を中心に和音注としたことに対して、改編本は大般若経と法華経の両経典に出現する字を和音注として重視したと言えるだろう³⁵。また、注目すべきは、カとキの比率がほぼ同じであることである。キはカに比べて「大般若経出現字でなく法華経出現字である」比率が低い、その分「大般若経出現字かつ法華経出現字」の比率が高い。そのため、カとキの法華経出現字の割合はほぼ同じ（約八〇％）である。このことから、高山寺本が、法華経出現字が多く含まれるなど、カとほぼ同じ性格を持つキの音注を削除することは考えがたい。むしろ、高山寺本の和音注の数が改編本共通祖本の形態に近く、観智院本祖本や蓮成院本祖本はカの状態からキの音注を増補していったと考えられる。その際、大般若経と法華経の両経典に出現する字を中心に和音注を増補したと言えそうである。

また、高山寺本の和音注の数が改編本共通祖本の形態に近いのであれば、和音注に「和」表示が付されないことも改編本共通祖本の形態であって、観智院本祖本や蓮成院本祖本が、当時一般的に使用された和音の表示を付したと考えるのが自然である。おそらく正音注と和音注の区別が難しいため、和音表示を付すようになったと推測される。このことの傍証として以下二つの点を挙げる。

先に原撰本から改編本に改編される際、原撰本の「公云」「真云」音注が、改編本で

表3 改編本諸本の比較調査結果	用例数	大般若経出現字かつ法華経出現字 (%)	大般若経出現字であり法華経出現字でない (%)	大般若経出現字でなく法華経出現字である (%)	大般若経にも法華経にも現れない (%)	大般若経出現字 (%)	法華経出現字 (%)
ア (図書寮本のみ在和音注が掲載されるもの)	113	30.1	56.6	1.8	11.5	86.7	31.9
イ (原撰本継承和音)	144	53.5	35.4	0.7	10.4	88.8	54.2
ウ (改編本増補和音)	220	78.2	3.6	15.5	2.7	81.8	93.6
エ (図書寮本の和音)	257	43.2	44.7	1.2	10.9	87.9	44.4
オ (観智院本法上・法中帖の和音)	364	68.4	16.2	9.6	5.8	84.6	78.0
カ (高山寺本の和音)	208	64.9	13.9	12.5	8.7	78.8	77.4
キ (高山寺本に存在せず観智院本に存在する和音)	140	75.7	15.0	4.3	5.0	90.7	80.0
ク (蓮成院本上一帖の和音)	277	68.2	16.2	8.3	7.2	84.5	76.5
コ (観智院本仏上・仏中帖の和音)	373	67.0	15.0	9.4	8.6	82.0	76.4
図書寮本の呉音	93					100.0	17.2
観智院本法上・法中帖の呉音	57					100.0	15.8
観智院本仏上・仏中帖の呉音	39					100.0	17.9

(表3補足) ケ、サについては、用例数が少ないために、表に載せることを省略した。

一方へ統合されることを述べた(二章一節)。例えば、凶書寮本「漚」(九四)「呉音公云蓋」^(五)、「真云又キ」が、観智院本(法上二五八)で「呉音蓋又キ」となるものである。

これら九例(注16)のうち六例が又音で結ばれている。そして八例が呉音表示で和音を統合している。このことは、高山寺本の和音注に「又音」注記が多いこと、基本的に「和音」の表示がないことと関連があるように思われる。この一方へ統合される事象は、いったん高山寺本の形態を挟むと考えることによつてうまく説明ができる。高山寺本残存部にも「遜」(六三四)「呉音選 ソン」が『大般若経字抄』一九丁裏に「音巽」、「曝」(一九五七)「呉北」^(八)又報^(平)又ホウ^(平)」が『大般若経字抄』五丁表に「音北」とあることもこのことを示唆する。ただし、高山寺本「辻」(五二三)「呉乍」が観智院本(仏上六八二)で「呉乍又サク」となっていること(『大般若経字抄』一八丁表は「音作」^(八))、高山寺本「健」(三〇七)「又音見 コン」が観智院本(仏上四七五)で「和見又去 コン」とあること(『大般若経字抄』二二丁表は「音見 コン」)などから、複雑な成立事情が窺える。

また、観智院本の仏上・仏中帖において、口部(呉音注なし)、目部(呉音注二例)などは、所属する字数に比して呉音注が少ないように思われる。この範囲には、例えば観智院本「呑」(仏中一七六三)の和音注「和敦」が高山寺本(二五七四)に見えず、『大般若経字抄』一五丁表の音注「音敦」に一致するというような例が散見され、中でも観智院本には「瞬」「眩」「瞽」(仏中一八三―一八四)などに、このような例がまとまって見える箇所がある。このことは偶然かもしれないが、敢えて憶測を立てれば、観智院本及び蓮成院本が『大般若経字抄』又は原撰本所引『大般若経字抄』を和音注として増補したように思われる⁽³⁶⁾。先に法上・法中帖で原撰本から改編本に改編される際、呉音注の増補がなかったこと(二章一節)も合わせて考えると、観智院本祖本や蓮成院本祖本が和音注を増補したことの傍証となる。

4 改編本『類聚名義抄』における和音注の継承と増補について

『類聚名義抄』の編者が呉音と和音を同一と考えていたか否かという問題を解決するため、原撰本と改編本の比較、改編本諸本間での比較から、改編本『類聚名義抄』の呉音と和音を考察してきた。改編本『類聚名義抄』の中で、高山寺本にのみ「和」表示がされず和音注が少ないのは、それが改編本共通祖本(改編本原初)の姿に近いからである。観智院本祖本や蓮成院本祖本は、高山寺本のような形態の改編本共通祖本に「和」表示を付し、さらに和音注を増補したと考えられる。つまり、和音注に関して言えば、原撰本↓改編本共通祖本(高山寺本に近い)↓観智院本・蓮成院本、と和音注を継承し、さらに和音注の増補が行われたということになる。

I 原撰本にはともに呉音系の音を表す「公云」呉音注と「真云」「行円云」和音注が見られる(この点はなお考察の余地があるが、この二つの表示が見られることが、すなわち原撰本撰者が呉音と和音を別のものと考えていたことにはならない)。

II 改編本共通祖本(高山寺本祖本)は原撰本の「公云」呉音注を「呉音」表示を付して継承し、原撰本の「真云」「行円云」和音注に多くの和音の増補を加え、単に「音」として和音注を表示した。

Ⅲ 観智院本祖本・蓮成院本祖本は呉音注に増補を行わず、和音注を増補した上で、新たに和音注に「和音」表示を付して継承した。

『類聚名義抄』の呉音注と和音注は、以上のような流れを想定できよう⁽³⁷⁾。

このことから、改編本編者が呉音と和音を同一と考えていたことを導くことができる。その根拠は、呉音注と和音注の表示を一つに統一する志向性が見られることである。高山寺本に呉音表示が見られる一方で和音表示がほとんど存在しないこと、観智院本及び蓮成院本が呉音の増補を行わず和音を表示し和音にのみ増補を行うことは、非常に徹底している。これは呉音及び和音の表示を、高山寺本は呉音に、観智院本と蓮成院本は和音に限定し、統一しようとする姿勢なのではないかと考えられる。呉音と和音の表示を両方登場させれば、現にこうして検討しているように、使用者に混乱をきたす恐れがあり、それを避けているのではないか。もし呉音と和音が異なるものであるならば、呉音と和音の表示が両方現れても問題はない。観智院本全体で呉音が二四七例、和音が一五八〇例ある中で、ある被注字に呉音と和音の両方が付される例は、「匪」(仏上八四八)、「畜」(仏中二三〇一)、「撫」(仏下本三三九七)、「熾」(仏下末四五六一)、「注」(法上四一一)、「謹」(法上七〇一)、「銓」(僧上一三一)、「凹」(僧下四二二五)のわずか八例に留まる⁽³⁸⁾。呉音と和音の表示を同一被注字につき一つにする傾向は、改編本の編者が呉音と和音は同じものであると考えていたことを示すと考えられる。

四、和音注から改編本『類聚名義抄』の系統と共通祖本を推定する

先に観智院本仏上・仏中帖で改編本諸本間の呉音注と和音注の数を比較した際、呉音注の数はほぼ同じであるが、和音注の数は高山寺本、蓮成院本、観智院本の順で増加することを述べた(三章一節)。和音注の形態は、高山寺本が古態を残し、観智院本と蓮成院本は高山寺本の形態に近い改編本共通祖本に、さらに和音注を増補したと考えられるので、高山寺本が他二本に先行すると考えられる。観智院本と蓮成院本の先後は、両本の和音注がほとんど一致するので決めがたい。そこで、高山寺本のような「和」が冠せられない音注を和音注の数に入れたいものとし、蓮成院本の欠損部は観智院本でも数から除いて、両本で和音注の数を比較してみる(表4参照)。

仏上・仏中帖の和音注の数は、観智院本二八九例、蓮成院本二七七例で、やや蓮成院本が少ない。次に、法上帖の和音注の数は、共に一〇七例であるが、相互に和音注の付される被注字には出入りがある。ただし、法上部は「水」「く」「言」三部首の比較のため用例が少なく、この部分の蓮成院本は、他の部分と素姓が異なるという指摘(山本一九八五)に留意する必要がある。最後に僧帖の比較であるが、僧帖は観智院本にも欠損する和音注の被注字があるため、両本に被注字が存するもののみを比較する。さらに、山本(一九八五)が、蓮成院本で他の部分と素姓が異なり、高山寺本と同系統と

表4 観智院本と蓮成院本の和音数の比較	仏上・仏中帖 ／上一帖	法上帖 ／中一帖	僧帖／下二帖
観智院本	289	107	310
蓮成院本	277	107	297
観智院本の和音注と対応する音注のうち、蓮成院本で高山寺本のように「和」表示がない音注	5	3	4

する又部後半、支部、爰部（三六五～三八〇）を比較対象から除く。そのようにして求められる僧帖の和音注の数は、蓮成院本二九七例、観智院本三一〇例で、やや蓮成院本が少ない。以上のことから、全体として観智院本の和音数が蓮成院本の和音数よりも多く⁽³⁹⁾、観智院本の和音注は蓮成院本の和音注をさらに増補したものと考えられる。したがって、和音注を手掛かりにすると、高山寺本→蓮成院本→観智院本という系統を導くことができる。

改編本『類聚名義抄』の系統（ここでは高山寺本、蓮成院本、観智院本の三本に限る）について、①岡田（一九四四、第二篇第一章、第四章⁽⁴⁰⁾）は、高山寺本に和音注が見られない点、観智院本雑部の無秩序である点、熟字や訓の増加している点などから、高山寺本→観智院本→蓮成院本と想定した。②渡邊實（一九六〇、一九七一）は、蓮成院本の熟字分注形式や「少女」以下の注文から、高山寺本→蓮成院本→観智院本と推定し、紙数分冊の高山寺本が部首数分冊の観智院本とは別系に属すとされた。③犬飼守薫（一九七四、一九七五）は、合点や熟字の数的考察から、蓮成院本→高山寺本→観智院本の成立順と考えた。④望月（一九七四、一九九二）は、四段活用の動詞の連体形が終止形を吸収することや、字音における平声軽声が重声へ合流することの進行度合いを声点から調査し、高山寺本→観智院本→蓮成院本と成立したと考えた。⑤草川昇（一九八二）は、熟字の数の観点から犬飼氏と同様の結論を出された。⑥山本（一九八六、二〇一六）は、改編本の熟字訓に新撰字鏡の和訓が見られる割合の考察から犬飼氏の系統を支持している⁽⁴¹⁾。

高山寺本、蓮成院本、観智院本三本の先後関係について、高山寺本が観智院本に先立つことは一致している（また、高山寺本は現存する改編本諸本の中で書写年代が最も古く、鎌倉初期写である）。問題は蓮成院本の位置であるが、高山寺本の前とする説⁽³⁾、⁽⁵⁾、⁽⁶⁾、熟字の考察が主である）、高山寺本と観智院本の間とする説⁽²⁾、観智院本の後とする説⁽¹⁾、⁽⁴⁾）が併存する。本稿では、和音注の観点から、蓮成院本が高山寺本と観智院本の間で成立したと考えた。ただし、これは他の説を否定することを意図するものではない。例えば、蓮成院本が熟字の面では古態を残し、和音の面では新しい様相を呈すると考えることは可能なのである。最後に、和音注の面から見た改編本の系統図を示す（ただし、実際の高山寺本・蓮成院本・観智院本は、このように単純な直線的関係とはならない）。

【和音の出典】『大般若経音訓』の傍書片仮名音注など

←和音の引用

【原撰本】「真云」注、「行円云」注

←和音の取捨・増補

【改編本共通祖本】「音」注（高山寺本に形態が近い）

←和音の増補

【現存する】改編本】「和音」注 蓮成院本→観智院本（最も和音注が多い）

また、高山寺本の和音注の形態が、改編本の原初の形態（改編本共通祖本）に近いものであることを述べた。今後様々な面から改編本共通祖本の形態を推定していくことも必要である。

五、結論

原撰本で呉音注「公云」と和音注「真云」「行円云」両者を存した注が、改編本で一方に統合されることは、改編本共通祖本（高山寺本祖本）の段階で起こったと考えられる。この時には和音注の表示はほとんど存在せず、主に呉音表示が存在した。一方、改編本の和音注の表示は観智院本祖本及び蓮成院本祖本の段階で付されたものと考えられる。

『類聚名義抄』は原撰本から改編本共通祖本（高山寺本祖本）の間と、改編本共通祖本から観智院本祖本及び蓮成院本祖本の間、少なくとも二度、和音注の増補が行われた。改編本編者が和音を増補する際は、大般若経と法華経の両経典を重視した。

改編本諸本は呉音、和音表示をどちらかに統一しようとする姿勢が窺える。呉音注（和音注）を表示する際、改編本共通祖本、高山寺本祖本は呉音に、観智院本祖本、蓮成院本祖本は和音に統一しようとした。これは改編本編者が呉音と和音を同一のものと見ていたために起こることである。

和音注の様相から考えると、改編本諸本は高山寺本―蓮成院本―観智院本の系統を窺わせる。和音注を単に「音」で表すことや和音注が少ないことから、高山寺本は改編本共通祖本に近い古態を残すものと考えられる。

六、『類聚名義抄』研究の課題と展望

最後に、『類聚名義抄』研究の課題と展望を述べたい（改編本『類聚名義抄』研究の課題は、大槻信二〇一八に詳しい）。これまで、原撰本『類聚名義抄』の研究は、注記の出典の特定と現存する出典との比較研究、改編本『類聚名義抄』の研究は、注記の出典の特定と改編本諸本間の比較研究が主になされてきた。今後は両者の研究成果を統合して、「出典―原撰本―改編本」の三者の記述を比較し、出典の注記が、原撰本及び改編本にどのように受容されているか、すなわち、原撰本から改編本に改編されるにあたって、どの注記を削除・継承・増補するのといった「改編の過程」を明らかにすることが必要である。

『類聚名義抄』の改編の過程を明らかにすることによって、辞書編纂者・利用者の撰述目的・利用目的の変遷を考えることは、本邦の辞書史において重要な課題である。

また、改編本諸本間の記述の比較も重要である。改編本諸本の先後関係や形成過程は、多くの説があり（四章参照）まだ明らかにされていない。最もはじめの改編本である改編本共通祖本から、現存する改編本が、注記をどのように削除・継承・増補したのかという「改変の過程」を明らかにすることによって、辞書編纂者・利用者の撰述目的・利用目的を考察できる。現存する改編本は、改編本共通祖本からそれぞれに独自の改変を加えているため、現存する改編本に共通する部分に着目して、改編本共通祖本を推定することができる。拙稿（鈴木二〇二一）では、改編本の呉音注が、改編本諸本間において異同が少ないことに着目して、改編本共通祖本の編纂過程や編者を推定した。このように、『類聚名義抄』の研究は、「出典―原撰本―改編本」という縦の比較考察と、「改編本諸本」という横の比較考察が必要であると考えられる。

また、原撰本から改編本に改編されるにあたり、字体注、和訓注が増加し、仏教の専門

的な注記、出典注記、漢文注の多くが削除される。しかし、『類聚名義抄』編者の字音注に対する意識がどのようなものであったかは、あまり明らかにされていない。日本語には音と訓がある。もとは中国語の発音であった「音」を、日本人がどのように考え、日本語へと受容したのかは、日本人が編纂した辞書から窺えることも多い。『類聚名義抄』は、反切注よりも同音字注を優先する(注2)、呉音と和音を明示する(注37)などの特徴があり、日本人の字音に対する意識を考える上で重要な文献である。今後は『類聚名義抄』編者(利用者)の音注に対する考え方についても、考察する必要があるだろう。

【注】

- 1 観智院本『類聚名義抄』の用例の所在は、被注字(見出し字)の位置によって、帖名と新天理図書館善本叢書(八木書店、二〇一八年)の影印の頁数(漢数字)、行数(算用数字)で(仏上五七1)のように示す。旧字や略字等は通行の字体に直す。声点等の記号は(平・平濁○)のように表す(○は当該文字に声点等がないことを示す)。仮名の右隣にある「レ」符号は濁音やng韻尾(鼻音)を表す。「/」符号は合点を表す。注文が割注であることは、特に示さない。翻刻の際の空白(スペース)は読みやすさを重視したため、実際の影印と空白の位置が異なる場合がある。「備」の被注字は「備」の異体字が三つ並んでおり、「上俗中通下正」はその字体について述べたものである。
- 2 正音注や和音注は、他に同音字注で表される場合がある。後に触れる『類聚名義抄』(原撰本及び改編本)の呉音注は、同音字注が基本である。例えば、「踐」字(法上九四5)は、「音饒」上、「呉音淺」平」とあり、漢音注(正音注)・呉音注ともに同音字注が使われている。こまつひでお(一九七〇)は原撰本『類聚名義抄』が、望月(一九九〇)は改編本『類聚名義抄』が、反切よりも同音字注を優先して掲出する傾向があると指摘する。
- 3 日本の漢字音は、漢音と呉音が併存することに特徴がある。唐音(唐宋音)は中国宋代以降の漢字音であるが、漢音・呉音に比べれば一般的に流布したものではなく、一部の語句に残存する程度である。また、漢字音には他に万葉仮名に残る呉音以前に伝来した古音、日本独自の読み癖等で通用する慣用音がある。漢音は二層に分かれ、漢音と新漢音とに区別する場合がある(沼本克明一九九七、第三部第三章に「新漢音分組分韻表」がある)。呉音は和音や対馬音とも呼ばれる。
- 4 『類聚名義抄』に関して言えば、沼本(一九九五)は、呉音の代表例として、観智院本『類聚名義抄』の呉音及び和音を取り上げている他、小倉肇(二〇一四)も同様である。
- 5 そのため、『切韻』(隋代の北方標準音)を基礎として構成される中古音とは、漢音・呉音共にずれを見せる。呉音は中古音と比べて、方处的にも時間的にもずれがあるだけでなく、時間的な複層性を有するので複雑な様相を呈する。沼本(一九八二、一九九七)等参照。
- 6 図書寮本『類聚名義抄』の用例の所在は、被注字の位置によって、勉誠社(一九六九年)の影印による頁数(漢数字)、行数(算用数字)で(八二7)のように表す。当該例の括弧内は虫損で、推定される字を示す。その後者は、それに続く注記が弘法大師空海撰『篆隸万象名義』(第三帖、一五丁裏)と一致し、「弘」字であると考えられる。当該例は和訓注と「真云」和音注の間に空白があり、そのことを五字空けで示す。当該例のように、図書寮本で呉音注(公云)は漢文注部分(『大般若経字抄』由来の和訓を引くことがあるので和訓注に近い位置)に置かれ、和音注(真云、行円云)は注の末尾(和訓注の後)に置かれることが原則である(図書寮本の注文の配列については宮澤俊雅一九九二に詳しい)。観智院本の和音注は通常注の末尾に置かれるが、「詳」字(法上六

二二)「和者ウ」のように、行間に書かれることがある。改編本諸本間で和音注の書写位置が異なることも多く、蓮成院本の「詳」字(二一九二)は「和者ウ^{○平}」が注の末尾(左下)の位置に書かれている。

7 図書寮本で「公云」が呉音注とされるものには、例えば「汎」(八四)「呉音公任云範」がある。ただ、言部以降は単に「公云」とのみ注されることが多い。「汎」は『大般若経字抄』一六丁裏に「汎漾 水无涯際也」とあり、被注字「汎漾」の右傍に「音範音様」とある。また、図書寮本で「真云」が和音注とされるものには、例えば「(鄙)俚」(一八一六)「真云今案(中略)和音ヒ^{○平}」がある。沼本(一九八二)が指摘するように、原則として真興の漢文注と和音注が「二続きの注文中に有る場合」(一七六頁)に和音表示がなされる。

8 この章の「呉音」と「和音」との関係―図書寮本類聚名義抄に依る検討―は、一九七八年『図書寮本類聚名義抄』真興音(和音)論統紹(『国語と国文学』第五五卷第一〇号)をもとにしている。

9 その他の「真云」和音注の問題としては、前者(漢文注)と後者(和音注)では「真」字に崩し方の違いが見えること(前者が楷書に近く、後者がより崩されている)や、和音注が原則として注の末尾(割注の左下の位置)に置かれ、それ以前の注(漢文注・和訓注)と離されて書かれるので、その間に不自然な空白を持つことが多いことが挙げられる。

10 初出は、一九七九年「観智院本『類聚名義抄』の和音注―法華経字彙との関連において―」(『訓点語と訓点資料』第六三輯)で、資料として『法華経单字』を用いる。

11 吉田氏、田尻氏、沖森氏の三氏は、『類聚名義抄』の呉音と和音は大体同じと考えているが、異なる部分を認める節もあるため、判断を保留した。吉田氏は、大体に於いて呉音と和音が同一と結論付けているが(五二頁)、統計による差異を認めており、平安朝の人が呉音と「古く傳つた呉音」である和音を区別したと考えている(四六頁)。

12 この認定の方法には問題があり、例えば「灌」字は図書寮本(九四)で「真云貫^{○平}」音とあるが、観智院本(法上二八四)で「和又去」とあり(蓮成院本も同)、原撰本継承和音には、原撰本を継承していないと考えられるものも含まれる。ただ、原撰本を継承したかどうかの線引きは難しく、調査の便宜上このように区別する。この例も改編本が和音に平声と去声の両方を認めており、平声のみを図書寮本から継承したと考えることは可能である。

13 蓮成院本は『鎮国守国神社蔵本三寶類聚名義抄』(勉誠社、一九八六年)の影印を用い、用例の所在は影印の頁数(漢数字)、行数(算用数字)で(二一九六)のように示す(中二等の帖名を入れると頁数と紛らわしいためである)。

14 和音注の認定は、図書寮本の場合「真云」「行円云」を冠する音注で、漢文注部分にないものとし、観智院本・蓮成院本の場合「和」の表示がある音注とする。用例数は被注字を単位としたため、例えば図書寮本「涕淚」(二七五)項の「真云テイ^{○上}ルイ^{○平}」は、「涕」と「涙」に分けて二字とし、図書寮本で「随」の和音注は(二〇〇二)と(二〇四一)に二度掲出されるが、この場合一字と算出する。また「汎」と「泛」は観智院本(法上一四六)で「二正」と一括されており、このように異体字等と考えられる場合も一字と算出する。図書寮本「畢蘭陁筏―(蹉)」(一〇四四)、「褐麗筏多」(二四三六)のような梵音漢訳の音注は、性格が異なるものと考え、取り扱わないこととする。

15 呉音注の認定は、図書寮本の場合「公云」を冠する音注とし、改編本の場合「呉」の表示がある音注とする。用例数の認定は和音注の方法(前注)に準ずる。図書寮本「梯陞」(二〇二一)項のように音注が抜けているもの、図書寮本「坑埒」(二二二四)項の「公云同坎」など音注と決めかねるものとはならない。他に図書寮本「塞迦」(二二五五)、「獸惡」(二四九四)、「指約」(三〇九二)も他の呉音注と性格が異なり、取り扱わないこととする。

- 16 本文中に挙げられる三例(「漑」「慊」「填」を除く他六例は、「汎泛」(法上一四六)、「淹」(法上三七三)、「躑」(法上一八一、前頁)「躑」の注に誤入)、「堆」(法中一八六七、次行)「渥」の注に誤入)、「惆」(法中二〇五七)、「恤」(法中二一〇二)。「淹」は、蓮成院本(一九二二)で呉音注が抜けているため、数に含めていない。
- 17 観智院本の「古氏反」は、蓮成院本(一一八一)の「古代反」の誤りと考えられる。『廣韻』に「古代切」(去声・代韻)とあり、『新撰字鏡』(巻六・一〇丁裏)に「古代古費二反」とある。また、蓮成院本(一一八一)は「呉音蓋又、(キの誤)」とある。
- 18 観智院本で「鋏」に声点はないが、呉音は基本的に上声のない平・去・入の三声体系である(沼本一九七六など)から、平声、入声でなければ必然的に去声と判明する。
- 19 他に改編本編者が呉音と和音を同一と見ていたと考えられる傍証として、「悖」字が図書寮本(二六五五/六)「真云ホチ(〇平)」、公云音背(平) 或作惣音發(入)から、観智院本(法中二一五七)「和發」となる例や、「織」字が図書寮本(三〇四七)「公云音占(平)」から、観智院本(法中二五三二)「和占(平)」となる例のように、原撰本と改編本で呉音と和音の表示が入れ替わる例が見られる。
- 20 この例については、観智院本であまり用いられない「立」で書かれた「音」字が用いられている点でも非常に特殊である。「立」が「音」を表す例は、世尊寺本『字鏡』の仮名音注などに見られて興味深い。
- 21 同一の被注字が別々の箇所挙げられ、一方で呉音、もう一方で和音が挙がっている例まで含めれば、「堆」(法中一八六七、呉音は次行「渥」の注に誤入)、「惆」(法中二〇五七、法中二二七八)の二例が加わる。「注」(法上一四一一)の被注字は「灌」(注)で、その直前にも「注」(法上一四〇八)があり、そこには割注の行間に「和シユ(平平) チユ(平平)」とある。
- 22 他にも『大般若経字抄』で「呉音」という当時において特異な呼称を用いたこと(沼本一九八二、第一部第二章)や編者の僧俗(公任と真興・行円)の違いなどが関連するかもしれない。和音注の典拠となった行円については、吉田(一九五四)は法相宗興福寺の僧とし、築島(一九六九)は天台宗三井寺の僧とする。
- 23 大般若経の字音点は、安田八幡宮蔵本の他に慈光寺蔵のもの(松尾拾一九四九、佐々木勇二〇一七)や根津美術館蔵のもの(佐々木二〇一八)がある。安田八幡宮蔵本は真興や興福寺との関係が想定されており(東辻一九七〇)、院政期頃の字音を反映し、音注の付される字が多く、索引が完備されていることなどの理由から、本稿では安田八幡宮蔵本を用いる。なお、江口(一九八六)は、安田八幡宮蔵本に関して、巻一―巻四〇〇と巻四〇一―巻六〇〇の間に「字音資料として質的差違が存する」(五六頁)と述べ、後者がより古いものと指摘する。
- 24 法華経の音義書は、他に『法華経音』など様々なものがある。小倉(一九九五)等参照。院政期頃の字音を反映し、音注の付される字が多く、索引が完備されていることなどの理由から、『法華経単字』を用いる。
- 25 大般若経音義や法華経音義などの注文部分に関連することも考えられる。特に原撰本の和音注の場合、真興撰『大般若経音訓』の注文を想定する必要がある。改編本の和音注については、改編本の編者が真言宗と考えられていることから、密教経典、空海の著作との関連が想定される。あるいは、様々な仏典に頻出する字に、改編本編者が和音注を付したことも想定する必要がある。
- 26 奥村三雄(一九六一)、沼本(一九七六)は、『類聚名義抄』の呉音及び和音に上声の少ないことを述べる。この点、經典の説誦音を表すため上声が出現する大般若経字音点や『法華経単字』等と性格が異なる。『類聚名義抄』の和音は仏典説誦を離れた音であり、そこに観智院本の和音に大般若経由来の被注字(原撰本継承和音)、法華経由来の被注字(改編本増補和音の一部)の両者が併存する理由があるかもしれない。

- 27 高山寺本『類聚名義抄』の用例の所在は、新天理図書館善本叢書（八木書店、二〇一六年）の影印による頁数（漢数字）、行数（算用数字）で（八七）のように表す。
- 28 『類聚名義抄』の残存部については、大槻信（二〇一八）の『『類聚名義抄』諸本残存部分一覽』に詳しい。
- 29 岡田（一九二三）は続けて、高山寺本は二例の和音注記があると指摘する。「亘」（八二三）の「和音コウ^{（平）}」と「唾」（一六〇二）の「和タ」である。この意味で高山寺本は和音注が二例のみであるが、以後は観智院本及び蓮成院本の和音注と共通する音注を高山寺本の和音注と考える。なお、高山寺本で「妣」（一〇八一）には、和音「和タム」と和訓「ネタム」で決めかねる注があるが、蓮成院本（五七一）に「和タン」とあることから、和音注と考えておく。観智院本（仏中一二八）では「ネ（子）タム」とある。
- 30 観智院本の仏上・仏中帖で和音注か存疑の例を以下に二つ挙げる。観智院本「邀」（仏上六九一）の「和カフ」は、高山寺本（五三一）、蓮成院本（一三三）ともに和訓「ネカフ」であるので、和音注と考えない。また、観智院本「省」（仏中一九四七）の和訓「ワカシ」は、高山寺本（一七七二）「又音カン」、蓮成院本（一一七三）「和カン」とある。この例について、高山寺本、蓮成院本は字形の似ている「看」字の和音注として考え、観智院本は和音注として考えないこととする。
- 31 山本（一九九〇）は四例とする。前述「脩」（仏上二八三）を加える。
- 32 山本（一九八九）には五六・四％とある。山本氏は和音が二形以上併記される例をそれぞれ分けた処理を行っている。本稿では被注字を単位とする処理なので、二形以上併記される例を一例で処理している。ただし数値に大差はない。
- 33 観智院本と高山寺本に和音注が見え、蓮成院本のみに見えない例は四例存する。
- 34 山本（一九八九）にも言及されているが、観智院本に和音注が存在し、高山寺本に存在しない例の中には、「廻」（仏上七三四）、「唾」（仏中一八二一）、「規」（仏中二〇〇三）などのように、正音注と和音注で全く音が異なるものも存する。また、山本（一九八九）に指摘があるように、観智院本仏上・仏中帖に三例存する「和同」注記が、高山寺本には見えない。ただ、蓮成院本はこの「和同」注記が二例存しており、少なくとも蓮成院本は、音が同じならば和音注を削除する方針ではない。
- 35 ただし、「大般若経にも法華経にも現れない」ものが一定数存することから、大般若経と法華経以外の要因を考える必要がある。実態としては、大般若経や法華経を中心に、それ以外の仏典に出現する字にも和音注を付したと考える方が正確だろう（注25参照）。
- 36 「吞」は「大般若経出現字であり法華経出現字でない」例である。築島（一九七七）の影印によれば、「吞」は無窮会本や天理本の『大般若経音義』で「鈍」と音注が付され（一二八頁、三六六頁）、特に『大般若経字抄』の音注と一致する。「眩」と「瞽」も同様である。
- 37 改編本共通祖本（高山寺本祖本）は、漢音と和音をともに「音」表示するので、漢音と和音を（「訓に対する）音」として一括りに考えていたと思われる（望月一九七九が指摘するように、漢音と和音を明示しなくても、漢字の注と仮名の注という音注の形態、注のはじめの音注と注の末尾の音注という音注の位置などによって区別できた可能性もある）。『類聚名義抄』で編者（僧侶と考えられている）が「呉音」や「和音」を明示することは、大般若経など仏典を読む際の音として、漢籍や韻書などに用いられる漢音と区別する意識が働いたものと考えられる。改編本共通祖本の編者は、同音字注のために漢音と紛れやすい「呉音」を明示し、その後の改編本の編者は、呉音に増補を行わないなど、呉音をあまり重要視しない一方で、それまでの「音」注の一部に和音表示を付し（和音の増補も行い）、漢音と区別した。特に仏門の編者や利用者にとって、「呉音」や「和音」の表示は便利なものであったと思われる。改編本（観智院本・蓮成院本）の和音表示はそのような需要のもとで付されるようになったのかもしれない。
- 38 同一の被注字が別々の箇所にも挙げられ、一方で呉音、もう一方で和音が挙げられている例まで含め

れば、「脩」（仏上二八三／五九四）、「匱」（仏上七三三／八五二）、「且」（仏上一〇〇二／仏中一九四八）、「今音シャ^{（平上）}」の「今」は「和（禾）」の誤写か存疑）、「皎」（仏中二五四／二三三）、「頤」（仏下本二八七八／二八八一）、「撞」（仏下本三二五一／三三八七）、「栞」（仏下末四三八八／四五八五）、「堆」、「惆」（注21参照）、「宿」（法下三四八六）、「刺」（僧上九二六／九九三）、「翻」（僧上一〇五三／僧下四〇六一）、「鞭」（僧中二八八／二）、「黜」（僧下三六五二／四一五五）の一四例が加えられる。

39 観智院本と蓮成院本で、呉音注の数を比較する（蓮成院本欠損部を比較対象から除く）と、仏上・仏中帖で二三例全同、法上帖で蓮成院本に「沖」（一八八三）の呉音注がなく、「淹」（一九二二）の呉音注が欠けている（他一四例は同じ）。僧帖は、蓮成院本が「帥」（五〇九二）「呉卒」の一例多く、観智院本（僧下四〇〇八）は「和卒」とする。他五六例は同じだが、その中で蓮成院本は「欽」（三二六三二）の「呉禁」にイ本注記がある。これらのことから、和音注に比して呉音注の数は、観智院本と蓮成院本でほぼ一致している。

40 初出は、一九二三年「高山寺本類聚名義抄攷」（『藝文』第一四卷第四号・第五号）、一九二九年「蓮成院本類聚名義抄攷」（『藝文』第二〇卷第六号／第一〇号）である。

41 他に、川瀬一馬（一九五五）は、高山寺本と観智院本を従兄弟関係、観智院本と蓮成院本を兄弟（又は従兄弟）関係以下にあると推定した。吉田（一九七六）には、高山寺本、観智院本、蓮成院本の成立順である旨が書かれ、小林恭治（一九九二）は、高山寺本、蓮成院本、観智院本の順で古態を伝える左寄せ注記が右寄せに変わることを指摘する。

【使用テキスト】

図書寮本『類聚名義抄』は、『図書寮本類聚名義抄』（勉誠社、一九六九年）による。

観智院本『類聚名義抄』は、『類聚名義抄観智院本』（新天理図書館善本叢書第九巻／第一巻、八木書店、二〇一八年）による。

高山寺本『類聚名義抄』は、『三宝類字集高山寺本』（新天理図書館善本叢書第八巻、八木書店、二〇一六年）による。

蓮成院本『類聚名義抄』は、『鎮国守国神社蔵本三寶類聚名義抄』（勉誠社、一九八六年）による。

『大般若経字抄』は、『大般若経音義 大般若経字抄』（古辞書音義集成第三巻、汲古書院、一九七八年）による。

『慧琳一切経音義』は、『正續一切経音義 附索引兩種』（上海古籍出版社、一九八六年）による。

『法華経单字』は、『法華経单字』（貴重図書影本刊行會、一九三三年）による。

『妙法蓮華経积文』は、『妙法蓮華経釋文』（古辞書音義集成第四巻、汲古書院、一九七九年）による。『廣韻』は、『校正宋本廣韻 附索引』（藝文印書館、一九六七年）により、声母や開合については『音注韻鏡校本』（木耳社、一九七一年）を参照した。

『篆隸万象名義』は、『高山寺古辞書資料第一』第一部（高山寺資料叢書第六冊、東京大学出版會、一九七七年）による。

『新撰字鏡』は、『天治本新撰字鏡増訂版 附享和本・群書類従本』（臨川書店、一九六七年）による。

【参考文献】

犬飼守薫 一九七四 「改編本系類聚名義抄諸本に見られる合点の考察―成立論への手がかり―」（『愛知県立惟信高等学校研究紀要』五）

犬飼守薫 一九七五 「改編本系類聚名義抄諸本の成立事情―熟字にかかわる問題点の一考察―」

- 〔愛知県立惟信高等学校研究紀要〕七)
- 江口泰生 一九八六 「大般若波羅蜜多經」読誦音について―資料の解釈と読誦音の変遷―」(『語文研究』第六二号)
- 大槻信 二〇一八 「類聚名義抄観智院本」解題」(『類聚名義抄観智院本』新天理図書館善本叢書 第一一巻、八木書店)
- 岡田希雄 一九三三 「高山寺本類聚名義抄攷(一)」(『藝文』第一四卷第四号)
- 岡田希雄 一九四四 「類聚名義抄の研究」(一條書房)
- 沖森卓也 一九八二 「観智院本類聚名義抄の和音の声調」(『白百合女子大学研究紀要』第一八号)
- 奥村三雄 一九六一 「呉音声調の一性格」(『訓点語と訓点資料』第一八輯)
- 小倉肇 一九九五 『日本呉音の研究』(新典社)
- 小倉肇 二〇一四 「類聚名義抄」和音注・呉音注対照表」(『続・日本呉音の研究』和泉書院)
- 川瀬一馬 一九五五 『古辞書の研究』(大日本雄辯會講談社)
- 草川昇 一九八二 「改編本系名義抄相互の關係―標出文字・和訓の面からの一考察―」(『訓点語と訓点資料』第六八輯)
- 小林恭治 一九九二 「類聚名義抄諸本の仮名注の記載位置について」(『訓点語と訓点資料』第八九輯)
- こまつひでお 一九七〇 「平安末期における漢音の一断面」(『国語と国文学』第四七卷第一〇号)
- 佐々木勇 二〇一七 「慈光寺蔵『大般若波羅蜜多經』平安後期字音点」(『慈光寺所蔵『大般若経』(安倍小水麻呂願経)の調査と研究―科研『平安時代の『大般若波羅蜜多經』遺品の総合的調査と歴史研究資料としての資源化』成果報告書―奈良国立博物館)
- 佐々木勇 二〇一八 「根津美術館蔵『大般若波羅蜜多經』鎌倉中期点」(『根津美術館蔵『春日若宮大般若経および厨子』調査報告書』国際仏教学大学院大学日本古写経研究所)
- 島田友啓 一九六四 『法華経単字漢字索引』(古字書索引叢刊)
- 鈴木裕也 二〇二一 「改編本『類聚名義抄』の呉音注と共通祖本について」(『国語国文』第九〇巻 第二号)
- 高松政雄 一九七三 「公任卿云「呉音」」(『国語国文』第四二巻第三号)
- 高松政雄 一九八二 『日本漢字音の研究』(風間書房)
- 田尻英三 一九七二 「図書寮本類聚名義抄の和音注の性格」(『語文研究』第三三三号)
- 築島裕 一九六九 「国語史料としての図書寮本類聚名義抄」(『図書寮本類聚名義抄』勉誠社)
- 築島裕 一九七三 「真興撰大般若経音訓について」(『長澤先生古稀記念国書学論集』三省堂)
- 築島裕 一九七七 『大般若経音義の研究 本文篇』(勉誠社)
- 沼本克明 一九七六 「呉音の声調体系について」(『国語学』第一〇七巻)
- 沼本克明 一九七八 「石山寺一切経蔵本大般若経字抄解題」(『大般若経音義 大般若経字抄』古辞書音義集成第三巻、汲古書院)
- 沼本克明 一九八二 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院)
- 沼本克明 一九八六 『日本漢字音の歴史』(国語学叢書一〇、東京堂出版)
- 沼本克明 一九九五 「呉音・漢音分韻表」(『日本漢字音史論輯』汲古書院)
- 沼本克明 一九九七 『日本漢字音の歴史的研究―體系と表記をめぐって―』(汲古書院)
- 東辻保和 一九七〇 「安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多經に就きて」(『海南史学』第八号)
- 東辻保和 一九七一 「安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多經の音注(資料)」(『訓点語と訓点資料』第四四輯)
- 東辻保和・岡野幸夫 二〇〇七 「安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多經の音注(索引)」(『訓点語と訓点資料』第一一九輯)

- 松尾拾 一九四九 「慈光寺藏大般若經の字音點について」(『国語学』第三輯)
- 馬淵和夫 一九六三 『日本韻学史の研究Ⅱ』(日本學術振興会)
- 馬淵和夫 一九七七 「音韻研究の歴史(1)」(『岩波講座日本語5 音韻』岩波書店)
- 宮澤俊雅 一九九二 「図書寮本類聚名義抄の注文の配列について」(『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院)
- 望月郁子 一九七四 「声点の認定をめぐる二三の問題―東点のつけちがえの点を中心に―」(『類聚名義抄四種声点付和訓集成』笠間書院)
- 望月郁子 一九七九 「観智院本『類聚名義抄』の和音注―法華經字彙との関連において―」(『訓点語と訓点資料』第六三輯)
- 望月郁子 一九九〇 「観智院本『類聚名義抄』の正音注―同音字注における図書寮本との一致を中心に―」(『人文論集』第四一号)
- 望月郁子 一九九二 『類聚名義抄の文献学的研究』(笠間書院)
- 山本秀人 一九八五 「蓮成院本類聚名義抄の成立について―異質な本文を有する部分の存在とその素姓―」(『鎌倉時代語研究』第八輯)
- 山本秀人 一九八六 「改編本類聚名義抄における新撰字鏡を出典とする和訓の増補について―熟字訓を対象として―」(『国語学』第一四四集)
- 山本秀人 一九八九 「高山寺本類聚名義抄における本文の改変について―文選説形式の和訓と和音注との場合を対象に―」(『福岡教育大学国語国文学会誌』三〇)
- 山本秀人 一九九〇 「蓮成院本類聚名義抄における高山寺本系本文の流入について―改編本類聚名義抄の異本同士の交渉―」(『福岡教育大学紀要』第三九号)
- 山本秀人 二〇一〇 「改編本類聚名義抄における注音方式の再検討―傍仮名音注・声点の朱墨について―」(『古典語研究の焦点』武蔵野書院)
- 山本秀人 二〇一六 『三宝類字集高山寺本』解題」(『三宝類字集高山寺本』新天理図書館善本叢書第八巻、八木書店)
- 吉田金彦 一九五一 「類聚名義抄にみえる和音注について」(『国語学』第六輯)
- 吉田金彦 一九五四 「図書寮本類聚名義抄出典攷(中)」(『訓点語と訓点資料』第三輯)
- 吉田金彦 一九七六 「解題」(『類聚名義抄観智院本』天理図書館善本叢書第三四巻、八木書店)
- 渡辺修 一九五三 「図書寮蔵本類聚名義抄と石山寺蔵本大般若經字抄とについて」(『国語学』第一三・一四輯)
- 渡辺修 一九七〇 「類聚名義抄の「呉音」の体系」(『国語と国文学』第四七巻第一〇号)
- 渡辺實 一九六〇 「西念寺本蓮成院本類聚名義抄について―関西大学現蔵本の紹介を機に原名義抄の編成の推定に及ぶ―」(『島田教授古稀記念国文学論集』関西大学国文学会)
- 渡辺實 一九七一 「解題」(『和名類聚抄 三寶類字集』天理図書館善本叢書第二巻、八木書店)
- SAT大蔵經テキストデータベース研究会 「SAT大正新脩大蔵經テキストデータベース²⁰¹⁸版」
(<http://21dtk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT2018/master30.php>)

【付記】

本稿は、既に発表した「改編本『類聚名義抄』における和音注の継承と増補について」(『訓点語と訓点資料』第一四四輯、二〇二〇年三月)をもとに、山本真吾先生、審査委員の先生方より多くの意見を賜り、修正を加えたものです。厚く御礼を申し上げます。